

令和7年度 国際交流員通信 3

「いいえ、お酒は飲めません」

お久しぶりです。王涛です。

この2ヶ月の暑さの中、みなさんいかがお過ごしでしたか？下関市は最高気温が35℃にもなったそうで、平年よりずいぶん暑いんですね。青島は今のところ最高気温は32℃ぐらいで、下関に比べると、少しだけ過ごしやすいかもかもしれません。

さて、この9月から、これまで私と一緒に仕事をしていた山野さんが青島に派遣されることになりました。山野さんがいなくなると寂しいですし、少し心配もしています。山野さんが到着したらもちろん温かい歓迎会が開かれると思いますが、何より気になるのは、現地のお酒の文化にうまく慣れることができるかどうかです。

私が下関市に来たばかりの頃、温かい歓迎会に招いていただきました。その時「お酒は飲めますか？」と聞かれて、「いいえ」と答えましたが、実は少しなら飲めるんです。でも中国で「飲めます」と言ってしまうと、大変なことになるので…。

そこで、今回は中国と日本のお酒の文化の違いについてご紹介したいと思います。それを知っていただければ、なぜ中国で「飲めます」と安易に答えてはいけないうか、お分かりいただけるでしょう。

お一人で飲めますか、それとも皆で飲めますか？

飲酒の場については、中日双方で似ており、プライベートな場か仕事上の場かのいずれかが主流です。私は普段、プライベートでは飲まず、仕事の場合に限って飲むようにしています。酒を酌み交わしながら、互いに語り合い、親交や理解を深める——これは一種のコミュニケーション手段と言えるでしょう。中国に「酒逢知己千杯少」という諺があります。つまり、意気投合した相手とであれば、千杯飲んでも物足りない、という意味で、そこには喜びの気持ちが込められています。

ただし、一人で飲むより、中国人はどちらかと言えば皆で共に飲むことを好みます。一人で飲むのは寂しすぎるし、何か悩みを抱えているような印象を与えがちです。中国ではそんな飲み方を「喝闷酒（悶々と酒を飲む）」と呼びます。

皆さんはどちらが多いですか？一人で飲むことが多いですか、それとも誰かと一緒に飲むことが多いですか？

白酒を飲みますか、それともビールを飲みますか？

飲み物を注文するとき、日本の方がよく「とりあえずビール！」と言う光景をよく見かけます。このフレーズは日本の飲み屋の定番台詞になっていますよね。ただ、「まずビールで」乾杯するという文化は中国にはありません。普通は最初から何を飲むかを決めて、基本的に一種類のお酒を最後まで飲み続けることが多いです。

ここで中国のお酒の種類と提供方法について触れざるを得ません。まず種類ですが、白酒、黄酒、ワイン、ビール等が主流です。最もよく飲まれるのは白酒とビールで、その次がワインです。私が住んでいる即墨区には「即墨老酒」という有名な黄酒があります。アルコール度数が約 30 度で、温めて飲むのが好きな人が多く、体が温まり健康にも良いとされています。一方、白酒は度数が高く、43 度や 53 度のものが一般的で、かなり辛口で酔いやすいです。ビールはアルコール度数は高くありませんが、大量に飲むことが多く、よく一人で数本飲む光景も見られます。



中国で一番高い白酒「茅台（マオタイ）」、500ml 約 4 万円

さらに提供方法ですが、中国では一杯単位ではなく瓶単位で売られることがほとんどです。そして、レストランも持ち込みを許可している場合が多く、自分で持参する人もよく見かけます。食事の際は一瓶をみんなで分け合って飲み干すのが普通です。そのため、日本のように「まずビール、次に焼酎、その後ジュース」という注文の方法にはなりません。—お酒を飲む人はジュースを飲まず、休憩したいときはレストランが提供する無料のお茶を飲むことが多いです。

ちなみに、ビールと白酒を交互に飲むと、吐き気を催す確率が大幅に上がると聞いたことがあります。普通はそういう飲み方はしません。また、ロックや水割り、ソーダ割りなどもほとんどなく（個人的には見たこともない）、ストレートで飲むのが一般的です。だからこそ、酔いも早いのです。そう考えると、日本の酒はととても優しく感じますね。本当に感動的です。中国で一杯しか飲めなかった私が、日本では三杯も楽しく飲めるようになりました。

お酒は多めに飲まれますか、それとも少なめですか？

初めての歓迎会の時、課長に「ゆっくり自分のペースで飲んでいいよ」と言っていただき、本当にホッとしました。どうやら日本では、飲酒は個人の意思をかなり尊重されるようで、酔いたくない場合は無理に飲まなくても大丈夫なのだと感じました。

しかし中国では、「ゆっくり飲む」という選択肢はありません。一度飲むことを選択したら、もう「少量で済ます」という選択肢はないのです。中国には「酔わずに帰らず」という言葉さえあり、酔うまで飲まないと家に帰れないという意味です。また、「深い絆は一気飲みであり、浅い縁はちびり飲みであり」という考え方もあります。つまり、飲めば飲むほど相手との絆が深いことを示し、少ししか飲まないのは誠意が足りないと思われがちです。そのため酒席では、だんだんと飲酒量がエスカレートしていき、飲みたくなくても勧められることが多く、これは私の苦手とするところです。相手側としては、客人に存分に飲んでもらわなければ接待が

不十分だという考えがありますが、ずっと飲み続けていると体が持ちません。ここには一種の微妙な駆け引きがあるのです。

さらに、今回は飲んでも、次回は飲まないということも難しいです。相手はあなたが酒が飲めることを知っているので、飲まないと、「前は飲んだのに今回は私と一緒にの時だけ飲まないなんて、私を軽視しているのか」と思われてしまうからです。これもまた悩ましい点です。そのため、正しい対処法は、最初の最初から「いやいや、本当に飲みません」と断言しておくことです。

日本人は飲酒時に無理強いをせず、個人の意思をより尊重してくれるので、私はいつも「まさかお酒を強要されることがないなんて！本当に優しいですね！」と感嘆させられます。

お酒は注ぎますか、それとも注がれますか？

日本で飲むときは、ほぼ毎回「飲み放題」を利用していますので、次々と注文して飲むことが多く、あまり注ぎ合う場面に見かけることはあまりないです。

一方、中国の飲み会において実に多くの礼儀作法があります。ここでは、白酒の礼儀を簡単にいくつかご紹介しましょう。まず、注ぐときはショットグラスいっぱい満たすこと。「酒満ちれば人を敬う」という教えがあるからです。次に、乾杯の際は目上の方のショットグラスより杯縁を低くすること。これが敬意を示す作法です。最後に、酒を注がれたら、指先で軽くテーブルを叩いて感謝を示します。青島では、杯をそっと支える仕草で敬意を表す習慣もあります。



日本人が最も戸惑うのは、中国の「敬酒」文化かもしれません——一人がテーブル全員に一杯ずつ献杯し、その都度異なる感謝の言葉を添え、献杯を受けた側は敬意を示すために杯を干すのが普通です。まさにマラソンのような飲み比べで、酔いつぶれるのも無理はありません。



日本の飲酒マナーはより繊細です。最も一般的なのは互いに注ぎ合うことで、自ら自分のグラスに注ぐことはしません。他人の杯を満たすことが、気遣いと尊敬の表現となるのです。中国でも尊重の念を示すために注ぎ合いますが、自ら注いではいけないという決まりはなく、とにかく酒が満たされていれば良いのです。

一次会、それとも二次会？

日本の二次会文化については前から聞いていましたが、ようやく日本に来て実際に体験することができました。その上で、今回新たに知ったのは「ゼロ次会」という、本格的に始まる前の一杯を楽しむ文化です。最初はこの「ゼロ次会」を理解できず、「日本の飲み会はこれ一杯で終わるのか？」と思っていました。さらに「もしかしたら日本では飲酒と食事が分かれてい

るのか？」と疑問に思い、「まずお酒を飲んで、その後で食事に行くのだらう」と想像していたりもしました。ですが二回目に参加した時に、この「ゼロ次会→一次会→二次会」の仕組みが理解でき、とても面白いと感じました。また、食事の時間が近づくと、水をあまり飲まないという習慣も初めて知り、非常に新鮮な経験でした。

一方、中国には二次会文化はなく、一回の宴会で食べたり飲んだりして満足すればそれで十分です。ただし、中国の宴会は一回でも長時間にわたることが多いです。夜8時から飲み始めて、深夜12時まで続くことだってあり得るのです。そして酔いつぶれた人は、酒を飲んでいない同僚や、呼んだ代行運転手によって一人ずつ家まで送られていく——これが中国式飲み会の終わり方です。

さて、皆さんは中国の飲酒文化について少しはご理解いただけただけでしょうか。そして、当初私が「お酒は飲めません」と答えた理由についても、お分かりいただけただけでしょうか。

ですから、山野さんが中国でひどく酔いつぶれてしまわないかと心配ではありますが、まあ外国人ですし、中国人の方々も多少は手加減してくれるでしょう。何より山野さんはお酒が飲めるので、きっと大丈夫でしょうね。😊